

# 女子学生の喫煙について

“Cigarette smoking among female students”

村 松 園 江

## I. はじめに

喫煙が人間の健康に悪影響を及ぼすことは今日までの数多くの報告から明らかであるが、タバコ消費量は減少するどころか、逆に増加しているのが現状である。Simpson,<sup>5)</sup> Herriot,<sup>6)</sup> 及び Lowe<sup>7)</sup> らは妊娠中の母親の喫煙は低体重児出産、あるいは早産の割合を高めていると報告し、また Manning<sup>8)</sup> は妊娠中の母親の喫煙は胎児性呼吸運動(fetal breathing movements)の発現時間を短縮しているとの報告している。

この様に女性の喫煙は肺ガン、気管支炎などを始めとする一連のタバコ病<sup>9)</sup>はもちろんのこと、さらに妊娠中の影響も心配される。そこで女性と喫煙に関する研究の一環として、まず女子学生の喫煙に関する調査を行ない、若干の知見を得たので報告する。

## II. 調査対象並びに方法

### (1) 調査対象

調査対象は愛知県下の国立一期校、国立二期校、私立文科系大学、私立医科大学、私立短期大学の女子学生、1年生413名、2年生163名、3・4年生91名、合計667名である。

### (2) 調査期間並びに方法

調査は昭和49年5月の各大学保健体育授業時に無記名質問紙法により行ない、その場で回収した。従って回収率はほぼ100%であった。

### (3) 調査項目

調査項目は次の8項目とした。

1. 女子学生の喫煙者率
2. 父親の喫煙者率
3. 母親の喫煙者率
4. 喫煙の動機
5. 自己の喫煙に対する意識
6. 女性の喫煙に対する意識
7. 男性の喫煙に対する意識

## 8. 非喫煙の理由

## Ⅲ. 調査結果

Table 1. Percentage of smokers among female students. ( $P < 0.001$ )

	Freshman	Sophomore	Junior, Senior	Total
Non smokers	379 (91.8)	142 (87.1)	67 (73.6)	588 (88.2)
Occasional smokers	31 ( 7.5)	13 ( 8.0)	18 (19.8)	62 ( 9.3)
Regular smokers	3 ( 0.7)	8 ( 4.9)	6 ( 6.6)	17 ( 2.5)
Total N(%)	413(100.0)	163(100.0)	91(100.0)	667(100.0)

## (1) 女子学生の喫煙者率

女子学生の喫煙者率は表1に示すようであり、喫煙しない者（以下、非喫煙者）は、1年生91.8%、2年生87.1%、3・4年生73.6%と学年が進むに従って減少し、反対に、時々喫煙する者（以下、非習慣喫煙者）と毎日喫煙する者（以下、習慣喫煙者）は、1年生8.2%、2年生12.9%、3・4年生26.4%と学年が進むにつれて増加しており、この傾向は0.1%以下の危険率で有意であった。

Table 2. Percentage of smokers among parents.

Father	N	%	Mother	N	%
Smokers	481	( 72.1)	Smokers	41	( 6.1)
Non smokers	176	( 26.4)	Non smokers	623	( 93.4)
No answer	10	( 1.5)	No answer	3	( 0.4)
Total	667	(100.0)	Total	667	(100.0)

Table 3. Relation between student's and parental smoking.

	father			mother		
	smoker	nonsmoker	total	smoker	nonsmoker	total
student smoker	59( 12.3)	20( 11.4)	79( 12.0)	9( 22.0)	70( 11.2)	79( 11.9)
nonsmoker	422( 87.7)	156( 88.6)	578( 88.0)	32( 78.0)	553( 88.8)	585( 88.1)
total	481(100.0)	176(100.0)	657(100.0)	41(100.0)	623(100.0)	664(100.0)
	(not significant)			(P<0.05)		

## (2) 両親の喫煙者率

両親の喫煙者率は表2に示すようであり、父親の72.1%が喫煙者で、26.4%が非喫煙者であった。また母親の93.4%が非喫煙者であった。

## (3) 両親との連関

両親との連関は表3に示すようである。父親とは連関は認められなかったが、母親とは5%以下の危険率で連関が認められた。すなわち母親が喫煙する家庭の女子学生は喫煙者が多いということが認められた。

#### (4) 喫煙の動機

喫煙の動機は表4に示すようであり、習慣喫煙者と非習慣喫煙者の79名を対象とした。喫煙の動機は「好奇心から」が58.2%と半数以上を占め最も多く、次いで「淋しさや、いやな気持ちを紛らわすため」21.5%、「友人に誘われたり、コンパですすすめられて」の17.7%であった。

#### (5) 自己の喫煙に対する意識

自己の喫煙に対する意識は表5に示すようであり、習慣喫煙者、非習慣喫煙者の79名を対象とした。自己の喫煙に対して、「よいと思う」と回答した者は無く、「適当ならよい」と回答した者が58.2%、「よくないと思うがやめられない」と回答した者が11.4%であり、どちらかと言えば自己の喫煙に対しては肯定的であった。

Table 4. Motive of smoking (N=79)

	n	%
Curiosity	46	(58.2)
Friends' suggestion	14	(17.7)
To divert mind	17	(21.5)
To avoid fatness	1	(1.3)
Would-be adult	1	(1.3)
Others	7	(8.9)
Total	86	(108.9)

Table 5. Smokers' opinion about smoking.

	n	%
Good	0	(0.0)
Good to a certain extent	46	(58.2)
Bad but can't stop	9	(11.4)
Others	21	(26.6)
No answer	3	(3.8)
Total	79	(100.0)

Table 6. Reactions to woman's smoking. (P<0.001)

	Freshman	Sophomore	Junior, Senior	Total
Good	43 (10.4)	15 (9.2)	17 (18.7)	75 (11.2)
Should not	148 (35.8)	61 (37.4)	13 (14.3)	222 (33.3)
Indifferent	218 (52.8)	87 (53.4)	61 (67.0)	366 (54.9)
No answer	4 (1.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (0.6)
Total	413(100.0)	163(100.0)	91(100.0)	667(100.0)

Table 7. Reactions to man's smoking.

	Freshman	Sophomore	Junior, Senior	Total
Good	165 (40.0)	55 (33.7)	35 (38.5)	255 (38.2)
Should not	36 (8.7)	10 (6.1)	10 (11.0)	56 (8.4)
Indifferent	211 (51.1)	98 (60.1)	46 (50.5)	355 (53.2)
No answer	1 (0.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.1)
Total	413(100.0)	163(100.0)	91(100.0)	667(100.0)

### (6) 女性の喫煙に対する意識

女性の喫煙に対する意識は表6に示すようであり、女性すなわち同性の喫煙に対しては「どちらでもよい」が最も多く、1年生52.8%、2年生53.4%、3・4年生67.0%であった。次いで「すうべきでない」1年生35.8%、2年生37.4%、3・4年生14.3%であり、また「よい」と回答した者は1年生10.4%、2年生9.2%、3・4年生18.7%であり、どちらかと言えば女性の喫煙に対しては否定的であった。1・2年生と3・4年生を比較してみると「すうべきでない」は1・2年生で多く、「どちらでもよい」、「よい」は3・4年生で多くみられた。この傾向は0.1%以下の危険率で有意であった。

### (7) 男性の喫煙に対する意識

男性の喫煙に対する意識は表7に示すようであり、男性、すなわち異性の喫煙に対しては「どちらでもよい」が最も多く、1年生51.1%、2年生60.1%、3・4年生50.5%であった。次いで「よい」1年生40.0%、2年生33.7%、3・4年生38.5%であり、また「すうべきでない」と回答した者は少なく、1年生8.7%、2年生6.1%、3・4年生11.0%であり、男性の喫煙に対しては肯定的であった。男性の喫煙に対しては学年別には差は見られなかった。

Table 8. Reasons of not smoke.

	Freshman	Sophomor	Junior, Senior	Total
For the health	141 (37.2)	68 (47.9)	27 (40.3)	236 (40.1)
Financial	11 ( 2.9)	3 ( 2.1)	1 ( 1.5)	15 ( 2.6)
Social opinions	84 (22.2)	15 (10.6)	4 ( 6.0)	103 (17.5)
Others	190 (50.1)	62 (43.7)	40 (59.7)	292 (49.7)
No answer	8 ( 2.1)	6 ( 4.2)	1 ( 1.5)	15 ( 2.6)
Total	434(114.5)	154(108.5)	73(109.0)	661(112.4)
(N)	379	142	67	588

### (8) 非喫煙の理由

非喫煙の理由は表8に示すようであり、非喫煙者588名を対象とした。「体に悪い」、「肺ガンになる」などの「健康的理由」が40.1%と多く、「親がうるさい」とか「周囲がうるさい」などの「社会的理由」は17.5%、「お金がかかるのが心配である」等の「経済的理由」は2.6%であった。しかし最も多く見られたのはこの3理由以外であり、「その他」の49.7%であった。

## IV. 考 察

タバコは酒と共に人間の二大発明と言われ、古くから人々の心を癒してきたとされている。我が国のタバコの歴史は16世紀の鉄砲伝来と共に始まり、その後、タバコのもたらす様々な事柄、例えば火災とか、タバコの栽培による米の減収とか、キリシタンの侵入などで何回もの「タバコ禁止令」が出されたがタバコをすう人口は一向に減少しなかったと言われている。<sup>10)</sup> 今

日我が国では1900年に制定された「未成年喫煙禁止法」により未成年の喫煙は禁止されているが、若年者の喫煙は増加しているのが現状である。

本調査でも女子学生の非喫煙者率は1年生91.8%、2年生87.1%、3・4年生73.6%と漸次減少し、逆に喫煙者率は1年生8.2%、2年生12.9%、3・4年生26.4%となっており、学年が進むにつれて増加している。<sup>11)</sup>重田は男子学生について、<sup>12)</sup>安栄は男子、女子学生について調査し、いずれも本調査と同様な結果を報告している。また安栄の調査と本調査とは対象の差、地域の差等の違いがあるので直接的な比較は難しいが、1969年の女子の喫煙者率より1974年、すなわち本調査の女子の喫煙者率の方が高くなっているようである。

女子学生の喫煙者では非習慣喫煙者、すなわち「時々タバコをすう者」の方が多いが、杉浦<sup>13)</sup>、安栄<sup>12)</sup>らの報告ではタバコをはじめて口にしてから習慣になるまでは比較的短期間であるとされており、現在は習慣的にはタバコをすっていないなくても近い将来習慣喫煙者になる可能性は極めて高いと見なければならぬ。

父親は72.1%、母親は6.1%喫煙しており、女子学生は父親とは連関が認められなかったが、母親とは5%以下の危険率で連関が認められた。すなわち、母親がタバコをすっている家庭の子供にはタバコをすっている者が多いことが認められた。<sup>14)</sup>村松らの報告でも、男子大学新入生と両親の喫煙の連関は父親と母親共に認められ、特に母親との関係の方が父親より大きいと述べている。また、<sup>15)</sup>Horn、<sup>16)</sup>Salber とも家族の特質、つまり父母の喫煙状況によって若年者は強く影響されると報告しており、本調査でも子供の喫煙は父母の喫煙に影響されていることが伺われる。

喫煙する動機については「好奇心から」が58.2%と最も多く、以下「淋しさや、いやな気持ちを紛らわすため」21.5%、「コンパですすすめられたり、友人に誘われたりして」が17.7%を示しており、比較的単純な理由から喫煙に入っているようである。<sup>17)</sup>白川は友人関係からの動機が68.1%を占めると報告し、また<sup>18)</sup>村松らは喫煙場所について女子は喫茶店という特殊な場所で喫煙する者が男子より多いと報告しており、その場の状況により友人にすすめられれば好奇心から簡単に喫煙するものと思われる。

女性と喫煙に関しては妊娠、胎児の発育、出産などに関連して様々な報告がなされている。<sup>8)</sup>Manningらは母親の喫煙は胎児の呼吸活動時間を減少させると報告し、また<sup>5)</sup>Simpson、<sup>6)</sup>Herriot および <sup>7)</sup>Lowe は妊婦が喫煙者であると早産したり、低体重児を出産する割合が高くなると報告している。一方<sup>19)</sup>Butler は妊娠中に喫煙をしていた母親の子供の発育発達を縦断的に研究し、その子供の身体的、精神的な発育発達に遅滞がみられると報告している。これら一連の報告においてタバコの煙が身体に及ぼす害のメカニズムについては明確にはされていないが、煙に含まれるCO、あるいはニコチンが二次的に作用しているのではないかと警告されている。このように女性の喫煙はタバコをすう本人だけでなく、子供（胎児）にまで影響を与えていること、それに一度習慣になると仲々やめられないというタバコの特質を考えると、興味本位で

大した理由もなくタバコを口にすることは慎みたいものである。

また、自己の喫煙に対しては「よい」という積極的な回答は皆無であるが、「適当ならよい」という回答が半数以上にも及んでおり、また、女性の喫煙に対しては否定的ではあるが、学年が進むに従って「すうべきでない」という否定的な回答が減少し、逆に「すってもよい」「どちらでもよい」などの回答が増加していることは甚だ残念なことである。また、男性の喫煙に対しては各学年とも「どちらでもよい」「よい」が大多数を占め、「すうべきでない」は少なく、男性の喫煙に対しては肯定的な意識を持っていた。村松らによる男子学生の喫煙に対する意識においてもほぼ同様な結果が得られている。今後さらにこれらの要因について鋭意追求し、解明に取り組んでいきたい。

非喫煙者の喫煙しない理由のうち、「健康的理由」「経済的理由」「社会的理由」の3理由の中では「健康的理由」が最も多かったが、この3つより「その他」の回答が多く、その他の回答の内容も記述していないものが大多数を占めていた。これはタバコをすわない理由として確固たるものがなく、つまり、女性が喫煙しないのは当然、あるいは「すおう」と思ったことがない等が考えられるが、この様に男性の喫煙に対して肯定的、女性の喫煙に対しては否定的な回答が多いことは母親には非喫煙者が多く、父親には喫煙者が多いという事実が反映していることが考えられる。

女子学生の禁煙対策を考える場合、タバコをすうことによってひきおこされる肺ガン、気管支炎などをはじめとするタバコ病はもちろんのこと、妊娠への悪影響についての知識の周知徹底を計り、且つ、家庭内の喫煙習慣を改めることが重要であると考えられる。

## V. 要 約

喫煙が人間の健康に悪影響を及ぼすことは明らかにされているが、タバコ消費量、並びに喫煙者率は増加しているのが現状である。そこで女性と喫煙に関する研究の一環として愛知県下の大学、短期大学の女子学生667名の喫煙状態について調査し比較検討を試み、次のような成績を得た。

(1)喫煙者率は1年生8.2%、2年生12.9%、3・4年生26.4%であり、学年が進むに従って喫煙者率は増加している。

(2)両親の喫煙者率は父親72.1%、母親6.1%であり、母親とは連関が認められた。

(3)喫煙の動機は「好奇心から」が58.2%と最も多く、以下「淋しさや、いやな気持ちを紛らわすため」21.5%、「コンパですすすめられたり、友人に誘われたりして」17.7%がみられ、比較的単純な回答が多かった。

(4)喫煙者の自己の喫煙に対する意識は「適当ならよい」が58.2%と過半数を占めており、どちらかと言えば肯定的である。

(5)女性の喫煙に対する意識は「どちらでもよい」が54.9%と半数を越えるが、「よい」とす

る者 (11.2%) よりも「すうべきでない」とする者 (33.3%) の方が多く、女性の喫煙に対しては否定的である。

(6)男性の喫煙に対しては「どちらでもよい」が53.2%と半数を越すが、「よい」とする者 (38.2%) の方が「すうべきでない」とする者 (8.4%) よりも多く、男性の喫煙に対しては肯定的である。

#### 参 考 文 献

- 1) U.S. Public Health, "Smoking and Health" Report of Advisory Committee to the Surgeon General of the Public Health Service (Washington). U.S. Department of Health, Education and Welfare. Public Health Service Publication. No.1103, 1964.
- 2) Dunn, J.E. et al, "Lung cancer mortality experience of men in certain occupations in California." A. J. P. H. 50, 1475-1487, 1960.
- 3) Hammond, E. C., "Smoking in relation to heart disease." A. J. P. H. 50, 20-26, 1960.
- 4) Dorn, H. F., "The mortality of smokers and nonsmokers." Proc. Soc. Stat. Sect. Amer. Stat. Assn. 34-71, 1958.
- 5) Simpson, W. J., "A preliminary report on cigarette smoking and the incidence of prematurity" Am. J. Obst. & Gynec. 73, (4), 808-815, 1957.
- 6) Herriot, A. et al, "Cigarette smoking in Pregnancy" The Lancet, 1, (7232), 771-773, 1962.
- 7) Lowe, C. R., "Effect of mothers' smoking habits on birth weight of their children" British Medical Journal, 2, (5153), 673-676, 1959.
- 8) Manning, F. et al, "Effect of cigarette smoking on fetal breathing movements in normal pregnancies" British Medical Journal, 1, (5957), 552-553, 1975.
- 9) 平山雄他 "喫煙の医学", 食の科学, 1, (2), 55-65, 1971.
- 10) 宇賀田為吉 "たばこの歴史" 岩波新書, 1973.
- 11) 重田定義 "大学生の喫煙習慣" 日本衛生学雑誌, 24, (1), 116, 1969.
- 12) 安栄鉄男 "大学生の喫煙について" 学校保健研究, 11, (7), 316-321, 1969.
- 13) 杉浦正輝 "喫煙の経験と習慣に関する調査" 第15回日本学校保健学会講演集 .97, 1968.
- 14) 村松常司他 "喫煙の経験, 習慣に影響を及ぼす諸要因の研究, 第2報, 男子大学新入生について" 学校保健研究 18, (1), 34-39, 1976.
- 15) Horn, D. et al, "Cigarette smoking among high school students" A. J. P. H. 49, (11), 1497-1511, 1959.
- 16) Salber, E. J. et al, "Cigarette smoking among high school students related to social class and parental smoking habits" A. J. P. H. 51, (12), 1780-1789, 1961.
- 17) 白川 充他 "某大学学生の喫煙に対する態度についての調査成績" 日本公衆衛生学雑誌 14, (6), 219-220, 1967.
- 18) 村松常司他 "喫煙の経験, 習慣に影響を及ぼす諸要因の研究, 第1報, 大学生に関する基礎的研究" 学校保健研究, 17, (11), 539-545, 1975.
- 19) Butler, N. R. et al, "Smoking in pregnancy and subsequent child development" British Medical Journal, 4, (5892), 573-575, 1973.